

《書評》

「国家改造」と「アジア主義」

— 『満川亀太郎書簡集』書評 —

萩原 稔

評者は、自身の担当する講義（受講者のほぼ全員が日本人）において、「アジア」という地域に含まれると考えられる国家の名前を思いつく限り挙げ、あわせて「アジア」という言葉から浮かぶイメージを自由に書くように、というアンケート（無記名）を行ったことがある。¹⁾ 前者の問いについては、最少で3か国、最大で45か国が挙げたが、日本を含めていないものも全体の一割強を占めていた。後者に関しては、分野別にわけると、経済（発展途上・豊かでない・物価が安い・貧富の格差など）、気候（高温など）、文化（精神的文化の優位・仏教など）、政治・歴史（対立・反日感情・ヨーロッパからの差別など）、社会・生活（不衛生・人口の多さなど）、その他（統一性の欠如・多様性など）、とさまざまな「アジア」のイメージが寄せられた。かような結果から見えてくるのは、日本を「アジア」の一員だと考えるものが九割近くを占める一方で、その「アジア」だと考える範囲が人によって全く異なること、また前述した「アジア」のイメージのなかに、日本があてはまるかどうか微妙なものも含まれている（「反日感情」あるいは「物価が安い」など）ということである。このことは、「ヨーロッパ」によって他律的に与えられた「アジア」（亜細亜）という枠組みを、日本人が自分たちのアイデンティティを形成している場としてとらえてはいないことを意味しているのではないか。そしてそれは、明治期において「脱亜」（福沢諭吉）を日本の進むべき道として選んで以来、現在にまで引き継がれているものなのかもしれない。

満川亀太郎（1888-1936）は、「アジア」とは何か、そしてその中に含まれるとされる日本が「アジア」との関係をどのように取り結んでいくかを真剣に考えた近代日本の思想家の一人である。彼は「アジア」の連帯を説く「アジア主義」者の一人として知られ、大正・昭和初期に数多くの著作を世に送り出した。その代表作『奪はれたる亜細亜』（1921年）で彼が描き出した「亜細亜」は、「独立国に於ては革命運動となり、附属国に於ては

独立運動となり、志士の血を流し屍を埋めて、有ゆる苦辛惨憺を嘗めつつその目的を果さんとした」(引用は、満川亀太郎著、C. W. A. スピルマン・長谷川雄一解説『奪われたるアジア』書肆心水、2007年、p19)と見たように、他者の抑圧に抵抗する人々の住む地を指すものであった。そして、日本国内でも一部の特権階級による恣意的な権力の独占が行われているというのが満川の認識であり、その日本政府が西洋列強と協調し、「亜細亜」を抑圧する側に回っているという現実を受け、満川は天皇を奉じてすみやかに日本の体制変革(「国家改造」)を行い、それと同時に対外政策の転換を断行すべきだと考えたのである。そして、満川と共通の認識を持っていたのが大川周明・北一輝という、近代日本における代表的な「右翼」思想家として位置づけられる二人の同志であった。満川と大川が結成し、北ものに加わった「猶存社」(1919年)は、日本の「国家改造」運動を目指した「革新右翼」の嚆矢として位置づけられる。大川と北の対立もあって、猶存社の活動期間は短かったものの、その後も彼らの思想・行動は同時代の日本に少なからぬ影響を与えたのである。

今回紹介する長谷川雄一・C.W.A. スピルマン・今津敏晃編『満川亀太郎書簡集——北一輝・大川周明・西田税らの書簡』(東京・論創社、2012年)は、満川の旧宅において発見された、満川宛の書簡(現在は国立国会図書館憲政資料室所蔵)を適宜選択して編纂されたものである。大川・北からの書簡は勿論のこと、「2・26事件」(1936年)で北とともに首謀者の一人として処刑された西田税や、彼と近かった菅波三郎や古賀清志などの陸海軍の青年将校、長年にわたり満川を理解者であった海軍出身の上泉徳弥、国会議員として活躍した永井柳太郎や中野正剛、さらに井上準之助・上原勇作・斎藤実・平沼騏一郎などをはじめ、満川の広い人脈を示すような多数の書簡が収録されている。あわせて、書簡の発信者のみならず、文中に現れる主要な人物や団体などにも詳細な注釈が付されていることも、読者にとって親切であるといえよう。

本書及び編者の解説から得られた知見として、以下の三点を挙げておく。まず、日本の「国家改造」運動における重要な位置づけを占めていた満川・大川・北の三者の関係を示す書簡が数多く見られることである。「猶存社」を結成したのち、満川は当時中国革命に関与していた北一輝を日本に呼び戻すため、大川を上海に派遣して北を説得させ、北は初対面の大川と意気投合し、彼の説得に応じて帰国を決意した、というのが大川や北に関する研究における通説であった。しかし、本書に収録された北一輝書簡(大正8(1919)年8月9日付)によれば、北は大川と会う以前の段階で、すでに満川に「月末頃には帰京の考へ」であると伝えていることがわかる(本書 p67)。いわば大川と北の「出会い」

が、「国家改造」運動におけるひとつの伝説のように語られてきたことを覆す史料であると言えよう。また他方で大川も、上海行き直前に出した書簡（同年8月6日付）で「予想外に費用を要するなどを知り、聊か困難を感じ申候」として、「金子を為替に組み、乗船紹介状とともに先方（＝北を指す）に送致せば、態々こちらから出かけずとも、先方も我を折りて帰国の途に就くべしと存ぜられ候ふ如何」と満川に相談を持ちかけており（同、p13。括弧内は萩原）、北との会見を絶対視していなかった節すらうかがえるのである。とはいえ、結果的に大川は予定通り北と会見し、北もまたそれによって帰国の意思を固めたのは事実である。

翌年初頭に北が帰国したのち、三者の蜜月関係は深まり、同年の大晦日に北が満川に出した書簡には、「古今の革命家中私共より幸福な心持を以て進んだ者はあるまいと存じます」「感謝を以て斯く結びつけられた吾々三人は地獄の果までも御前とならばどこまでも敬ひつつ来る十年も十一年も」とまで語られている（p84）。しかし、ソビエト＝ロシアの承認問題や、「安田共済生命事件」「宮内省怪文書事件」などを受けて三者の関係に亀裂が入り、昭和期に入ると彼らが「国家改造」に向けて活動を共にすることはなかった。ただし、その後も満川が大川・北と書簡のやり取りをし、著書を謹呈していたことなども本書所収の書簡から明らかである。この点は個性の強い大川・北との関係をうまく取り結んでいた、満川の円満な人格を物語っている。

第二に注目すべきは、「ユダヤ禍」ないし「ユダヤ陰謀史観」論への満川の批判に関するものである。満川は前述した『奪はれたる亜細亜』でも、ユダヤのシオニズム運動を好意的に紹介しており、その後も一貫して「ユダヤ禍」論を「迷妄」と断じていた。一方、当時の日本の論壇では「ユダヤ禍」論を声高に語るものも少なくなく、満川との間で盛んに論争が繰り広げられた。本書には、満川を支持する人々からの書簡とともに、満川を批判する側からの書簡も寄せられている。とりわけ強硬な「ユダヤ禍」論者だった松居甚一郎とは、昭和3（1928）年～昭和4（1929）年にかけて六度にわたる書簡の往復を行っている。松居の書簡からは当時の「ユダヤ禍」論の一端が理解できると同時に、それに向き合った満川の真摯な人格を看取することができる。今年（2014年）、東京の公立図書館や書店などにおける『アンネの日記』破損事件を受け、日本人のユダヤ人に対する差別意識の有無などについても国内外で議論されたことは記憶に新しいが、戦前のいわゆる「右翼」の中にもユダヤ人問題に関する論争が存在したことは注目される。

そして第三に、満川が獲得していた読者層の広がりである。書簡の中には、満川と小学校時代以来の友人であった建築史家の能勢丑三が猶存社の機関誌『雄叫び』や、1925

年に満川・大川らが結成したとされる行地社の機関誌『月刊日本』の購読者獲得に奔走していた様子がうかがえるが、それ以外にも、先の「ユダヤ禍」論に際して満川の立場を強く支持した川上秀四郎（宮城県電気局勤務）、満川の著書への感想を寄せた山口県在住の田中武、萩高等女学校の校長を務めていた筒井捨次郎、陸軍士官候補生の堀之内吉彦など、いわば無名の人物との書簡のやり取りがあったことがわかる。満川らが提唱した「国家改造」への期待感が、当時の日本において一定程度受け入れられていたことを示すものであろう。

他方、いわゆる「アジア主義」にかかわる内容は、北一輝書簡のなかに収められている、北の未公開の原稿「白人世界征服ノ経路」（p96-p98）や、またインドの独立運動家であったラス・ビハーリー・ボースからの書簡などを除けば、さほど多く示されているわけではない。ゆえに「アジア主義」に関心を抱く読者にはやや物足りないかもしれない。ただし、上泉徳弥が中国人を侮蔑する表現を講演で使ったことを満川が注意したというエピソード（上泉書簡、昭和6（1931）年6月8日付、p46）からは、満川の「アジア」に対する姿勢の一端がうかがえる。ちなみに上泉も満川の指摘に「至誠之友情」を感じ、「大に将来注意致す事に可致候」と答えている。近隣諸国を罵倒し、軽蔑する言辞が「愛国」的だと信じられるような風潮が広がりつつある昨今の状況を考えるとき、このような満川の言動は、その「右翼」としてのイメージとは別に、高く評価されるべきではないだろうか。

また、満川とボースとの交友については、近年刊行された長谷川雄一・C. W. A. スピルマン・福家崇洋編『満川亀太郎日記——大正八年～昭和十一年』（論創社、2011年）に記述がある。この日記もまた、満川及びその周辺の思想家に関する貴重な史料であり、本書とあわせて一読していただきたい。

最後に些細なことではあるが、『満川亀太郎書簡集』という題名にもかかわらず、表紙に北一輝の写真のみが掲載されているのは違和感を覚える。北からの書簡が多く収録されているのは事実であるが、やはり満川・大川の写真もあわせて並べるべきではなかったか。そうすればこの三者のつながりがより明確に印象づけられたと思われる。

いずれにせよ、日本の「国家改造」運動、そして「アジア主義」者の思想及び行動の実態については、まだ十分に研究されているとは言えない。本書はその意味でもきわめて重要な意義がある。そして、本書に収められた書簡に対して、満川がどのような返事を送ったのか、すなわち満川発の書簡の内容はいかなるものであったのかも興味深い。今後さらなる史料が発掘されることを期待したい。

注

- 1) これについては、かつて拙稿「アジア——対立と共同のはざままで」、出原政雄編『歴史・思想から見た現代政治』（法律文化社、2008年）所収、p205-p207でも言及している。当時のデータは、2006年の同志社大学「政治学」・2007年度の阪南大学「日本政治史」でのアンケートであるが、今回はそれに加え、2013年度の大東文化大学「日本政治思想史」の講義において、68人の受講生から回収した同様のアンケートのデータも反映させた。

